

国立音楽大学附属中学校入学試験問題

平成三十年二月一日実施

国語

解答はすべて解答用紙に記入すること。

一、次の①～⑩の——線について、漢字は読み方をひらがなで書き、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 震災のイチジルしい被害について調べる。
- ② 災害にソナえて、保存食を用意する。
- ③ チンタイ住宅の申し込みをする。
- ④ 体験記をヘンシユウする。
- ⑤ 月が夜道をテらす。
- ⑥ コーチの就任演説を聞く。
- ⑦ 限界をこえる練習を試みる。
- ⑧ 雪で船の安全を危ぶむ。
- ⑨ 船の航行の無事を祈る。
- ⑩ 試合で優勝を果たす。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

自分の顔とは不思議なものです。自分のものであっても、自分で見ることはできない。その人の身体に属しているけれど、完全に自分のものとは言い難いところがあるようです。

それでは、顔は、誰のものでしょうか。その顔をちゃんと見て大切にしているのは、むしろ他者ではないでしょうか。アイドルの顔写真がファンの人たちに大切にされていたり、子どもの顔写真を親が携帯電話の待ち受けに使っていたり、亡くなった大切な人の顔写真が写真たてに飾られているのを見ると、顔は自分以外の人のためにあるもののように思えます。顔が誰かのためにあるとしたら、なおいつそう自分の顔は気になるといえるでしょう。

その一方で、顔を気にすることは、やはりどこか浅はかだとも思えます。顔に振り回されるなんて、ほんとうにばかばかしいと思わされます。それでも、顔で得をする人を、あちこちで目にすることがあるでしょう。そんな様子を見ると、なんとも複雑な気持ちにさせられます。

学校の中でも、美人や美男子は、パツと目立ちます。それだけで、同級生や先生から一目置かれていたような気がして、得をしているように思えてなりません。

ですが実際のところ、美人や美男子はそれほど得をするものではないことが、社会心理学の研究からわかっています。良くも悪くも美人や美男子は目立ち、「美人や美男子は、よい人であるのが当たり前」という先入観が強く植えつけられるからです。その先入観による呪縛に悩まされ続けるのが、美人や美男子の運命ともいえましょう。よい人を前提として評価されるため、よいことをしても当然だということになります。逆に少しでも悪いことをすると、極端にマイナスに評価されることにもなります。「やっぱり、美人は性格が悪いね」となってしまうのです。

みなが同じように持つて生まれた顔なのに、それで損したとか得したとか評するのも、おかしいことに思えます。自分の顔についても、「なんで、こんな顔なのだろう」と思うこともあります。考えてみれば、それも変な言いぐさです。

そもそもなぜ、顔を比較したりするのでしょうか。自分の顔が理想とは違うと思うとき、それはいつたい、どんな顔と比較していたのでしょうか。実はこうした行動は、私たちが顔を記憶するメカニズムと関係している可能性があると思います。

実際のところ、それぞれの顔には大した違いはありません。1 身近にいるイヌやネコを考えてみましょう。犬種や柄でそれぞれの個体を区別できたとしても、顔だけで区別することは、飼い主でない限りは難しいです。しかも、顔だけでイヌやネコの魅力のランキングを付けるのは、相当難しいですね。

人の顔も、これらと同じくらい、似たもの同士の集まりにすぎません。その一方で、私たちの暮らしている社会では、たくさんの人の顔を覚えていることが当然とされています。学校の外で親しい友人や担任の先生にばったり出会って、そしらぬふりで素通りすると、後で相当まずい思いをしますよね。しかし、こうした状況でさりげなく挨拶できるのは、相手の顔をしっかり覚えているからこそ、できることです。

顔を覚えていないと、この社会で暮らすうえでは相当に大変な思いをします。2 実は、人口の二%程度の割合で、顔の区別が

つかない人がいるのです。こうした人たちは、様々な困難に見舞われることになります。会社では、上司の顔を覚えていないと大変です。部長への電話を受けて、当の部長が隣の社員と立ち話をしているその横で、「部長は席を外していて不在です」と言ってしまうたら、どうでしょう。人の顔がよくわからない社員は、席にいるかどうかでしか、部長の不在を確認することができないのです。

2 私たちは、同じように見えるはずの顔を、細かく区別できるのです。とても不思議なこと、まるでそれは、顔同士の細かい違いをズームレンズで拡大して見て比較しているようなものでもあります。それぞれの顔の特徴の違いを強調して、一所懸命覚えるようにできているのです。

これほどまでに人の顔を細かく区別できるのは、比較による学習のなせるわざです。社会の中でうまくやっていくために顔を覚え

る、そのため知らないうちに顔を比較しているのです。

3「顔を見ると比較する。その癖が、他人の顔でも自分の顔でも、なんであれ人の顔であつたら自動的に比較してしまう、ついでに評価してしまう行動へと導いていると考えられるのです。

ここで美男・美女の問題に戻りましょう。美男・美女は目立つとしても、実際のクラスの人気者は案外別の人の場合が多いのではないのでしょうか。結局のところ人気者は、ムードメーカーだったり、やさしい癒し系の雰囲気がある子だったりするのではないのでしょうか。顔立ちがそれほど目立つことはないけれど、気安く話ができ、時間がたつうちに人気を獲得していく人物もいるでしょう。³ではそれはいったい、何によつて決まるのでしょうか。

⁴そこには、表情というマジックが関係しているのです。つまり顔は、土台プラス表情の変化なのです。

ふだん華やかに見える女性が、たまたま無表情でいるときに、意外に無骨な顔をしているように見えたり、全く違う印象に見えたりしたことはないでしょうか。あるいは、写真に写った自分の姿が、同じ自分の顔なのに、時には気に入ったり、時には気に入らない顔だったりするのはなぜでしょう。緊張したり油断したりして、「変顔」に写っていることもあるでしょう。自分らしくない表情の時も、あるでしょう。

そこにいくとプロのカメラマンは、モデルをリラックスさせて、「その人らしさを引き出すことに長けています。その人らしさは、その人の持つ独特の表情が伴った顔をさします。表情は、大切です。こうした表情をうまく使いこなす人こそが、好まれる顔を演出しているともいえるのです。

(山口真美著『自分の顔が好きですか? 「顔」の心理学』より)

*1 呪縛: 相手の自由をうばつて、自由をきかなくさせること。

*2 無骨: 礼儀作法を知らないこと。

問一 ~~~線 a 「一目置かれている」、b 「さりげなく」、c 「長けて」とありますが、その意味として最もふさわしいものを次のア~エから選んで、それぞれ記号で答えなさい。

a 「一目置かれている」

ア えこひいきされていること

イ 良く評価され尊重されていること

ウ 恐れさせられていること

エ きげんをとられていること

b 「さりげなく」

ア 深く考えず自然にふるまう様子

イ 礼儀正しくふるまう様子

ウ 優しくふるまう様子

エ 元気にふるまう様子

c 「長けている」

ア あることを長く続けていること

イ あることに優れていること

ウ あることに慣れていること

エ あることに努力していること

問二 1 3 にはどのような言葉が入りますか。最もふさわしいものを次のア~エから選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア つまり

イ なぜなら

ウ ところが

エ そして

オ たとえば

問三 顔で得ををすると思われている人が、実はそれほど得をしていないのはなぜですか。わかりやすく説明しなさい。

問四 線 1 「顔を記憶するメカニズム」とありますが、何のために人はこのようなメカニズムを持っているのですか。その理由を文中から十五字で抜き出さなさい。

問五 線 2 「私たちは、同じように見えるはずの顔を、細かく区別できるのです」とありますが、何によつて人はこのようなことができるようになるのですか。文中から七字で抜き出さなさい。

問六 線 3 「ではそれはいったい、何によつて決まるのでしょうか」の「それ」とはどのようなことを指していますか。次のア~エから選んで、記号で答えなさい。

ア いい人と悪い人の顔

イ 美男・美女の顔

ウ 人気を獲得する人の顔

エ その人らしい顔

問七 線 4 「表情というマジック」とは具体的にどのようなことですか。「表情」「印象」という言葉を用いて説明しなさい。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「あたし、こんど、生徒会の書記に立候補することになったよ」

とおねえちゃんの歌子がいい出したのは、夏休みがおわり、学校が始まってすぐのことだった。

お盆ぼんがおわると同時に、みじかい夏休みもおわってしまうのだが、チヅルはまだ夏休みボケで、学校にいつてもボーッとしていることが多かったから、歌子が書記に立候補すると聞いて、

（中学校は、休みがおわったらすぐに選挙なんかするのか。いそがしいなア）

とびつくりしてしまった。

「そうか。書記か。そういうのは、一年生が出ていいのかい」

オトーサンが嬉しうれそうにいい、ご飯をよそっていた母の清子も、

「一年生のうちから、あんまり目立つことすると、まずいんじゃないの」

と面倒臭めんどうくさそうにいいながら、顔はすつかり、にこにこ笑っているのだった。

そういうのは、もうまったく、歌子が小学校の卒業式で答辞を読むことになったときとおなじ態度だった。

「あしたから、推薦すいせん人や選挙対策本部の人たち、ウチに集まることになったから」

と歌子はなんでもないのでいい、とたんにチヅルはわくわくした。

選挙タイサク本部というのがいかににも本式の感じがして、やっぱり中学校はちがうとすっかり感心させられてしまった。

翌日、チヅルは掃除当番をおえるなり、

I

いつものようにハイシャ車庫や材木置き場で遊ぶどころではなくて、なんとしても選挙タイサク本部というのを見てみたいのだった。

家に帰ってみると、歌子のほうが先に帰ってきていた。

二階の部屋を掃除しているらしく、何度も階段を上りおりしては、忙しいそそうにしている、チヅルなんか目に入っていないようだった。

なんとか歌子の興味をひきたくて、茶の間のソファに寝そべったり、でんぐり返りをしたり、逆立ちをしたりしてもてんでダメで、そのうち歌子がカルピスをつくり出したので、チヅルは思いあまって、台所と茶の間をしきるガラス引き戸によりかかって、

「おねえちゃん、チヅルのもつくって」

と甘ったれた声でいった。

カルピスが欲しいのはほんとだったが、それよりも歌子にかまってほしいのだった。

「なに、ほしいの？ 自分でつくんなさいよ。あたし、忙しいんだから」

歌子はあつさりといつて、お盆にカルピスのはいったコップをのつけて二階にいつてしまった。

悔しくてブスふくれていると、ふと台所の茶ダンスの中に、うす焼きセンパイがお菓子鉢かしばちにはいつているのが見えた。

いつもだったら、食べていいといわれてないお菓子は食べないのだけれど、なんとなく、おもしろくない気分だったので、チヅルは思いきつてガラス戸をあけて、うす焼きセンパイを五、六枚つかんで、やけっぱちのようにぼりぼりと食べた。

二階からおりてきた歌子は、茶ダンスの前にすわりこんでセンパイを食べているチヅルを見て、

「チヅル、あたしが買ってきたお菓子、かってに食べちゃダメじゃない！」

とどなった。

「きてくれるみんなのために買ったのに。お母さんにいつけるよ」

歌子はうわずった声でいつて、チヅルを押しつけて、茶ダンスの中のお菓子鉢を取りだし、さつさと二階にもつていこうとする。階段を五、六段のぼったところで、

「チヅル、外に遊びにいつていよ。友だちがきても、浮かれあがつて、話に入ってきたらダメだよ。みんな、だいじな用事でくるんだから」

A いつて駆けあがつていつた。

チヅルはぼかんと見上げていたが、ふいに目じりに涙なみだが浮かんできた。

①

と思うと、熱いお湯をのんだように、喉のどから胸にかけてのあたりが、カッと焼けるようだった。

母の清子は、小さなことでもキンキン怒るのだけれど、そういうときは、せいぜいツネツネたり、ゲンコツで叩いたりするくらいなのに、黙だまってお菓子を食べるのと、お客さんがきてるときにふざけるののふたつには、鬼おにのように怒りだすのだった。

小学校に上がってすぐのころ、学校から帰ったチヅルは神棚かみだにお菓子箱がのっているのをめざとく見つけて、イスにのぼつてお菓子箱をとった。包み紙を破つて、フタを開けると、中にぎつしりとモナ力が入っていた。

清子が、そんなリッパなよそゆきのお菓子を買うはずはないから、お客さんが持ってきたのに違いなかった。

清子は買物に出ているらしくて、食べていいかどうか聞けなかったのと、どうしても、すぐに食べたかったのとで、チツルは五つも食べてしまった。

ほんとは、ひとつかふたつにしておこうと思っただけで、食べてみたらおいしいので、ついつい五つも食べてしまったのだった。買物から帰ってきた清子は、すぐに気がついて、

「チツルは泥棒になった。口のいい子^こは、気持ちもいやしいんだ。泥棒したんだから、警察につれていくよ。お父さんが帰ってきたら、警察につれてもらう」

とすごく怒り、チツルは両手をしばられて、奥の座敷の柱に縛りつけられてしまった。

「もう、しないよオ。もう、だまって食べないよオ。ごめんなさい。もう、しないよオ。いやしいこと、しないよオオ。ケイサツに連れていかないでエエ」

と泣きじやくりながら謝っても、清子はぜんぜん許してくれずに、知らん顔で夕ご飯をつくっていた。

このまま夜になっても縛られているんじゃないか、オバケが出てきても逃げられない、それにケイサツにつれていかれたら、すぐくイジめられるかもしれないと次から次へと妄想^{*1}がわいてきて、ますます泣けてきた。そのうち泣くのをやめようとしても、しゃっくりが止まらなくなり、息が苦しくなってくるほどだった。

あたりはすっかり薄暗くなり、チツルも泣きすぎて体が熱くなってきたころ、外に遊びに出ていたおねえちゃんの歌子が、そっと座敷にはいつてきて、紐^{ひも}をほどいてくれた。

「お母さんが、ほどこいていいっていったんだよ。あのお菓子、よそに持つてくんで買ってあったヤツなんだって。チツル、いやしんぼしたから、怒られたんだよ。ちゃんと謝っておいでよ」

歌子はひそひそ声でいった。

チツルは泣きすぎて、ぐったりして立ち上がることもできないほどだったので、膝^{ひざ}でいざりながら台所までいって、きちんと正座して謝って、ようやく許してもらった。

その夜は、ご飯を食べても吐きそうなほど気分が悪くて、すぐに寝てしまったけれど、目がさえてぜんぜん寝つかれないでいると、隣の布団で寝ていた歌子が、ごそごとチツルの布団に入ってきて、

「お母さんはきつと、ムシのいどころが悪かつたんだよ。あんなに怒るのは、ひどいよね。おねえちゃんは、チツルの味方だからね」耳元に息を吹きかけるように小声でささやいて、そうと手を握^{にぎ}ってくれた。

泣き疲れて、すこし発熱^{つか}しはじめていたチツルには、ひんやりしたおねえちゃんの掌^{てのひら}はふわふわと気持ちよくて、たかぶつていた気分がすうつと鎮^{しず}まってゆくようだった。

チツルはおねえちゃんが前から好きだったけれど、そういうことがあって、ますます好きになっただけで、それからは清子に叱^{しか}られても、おねえちゃんが味方だと思つと、あんまり悲しくなくなり、泣かなくなっていたのだった。

(②)

チツルは見捨てられたような惨^{あは}めな気持ちになり、息がとまりそうだった。

おねえちゃんは中学生になつてから、二階に部屋をもらつて、ただでさえ、かまってくれなくなっていたのに、今はかまうどころか、チツルが嫌いになつたんだと思えなかつた。

(③)

チツルは茶の間のソファにとびのつて、ソファの背にしがみつくようにして、涙をこらえた。

歌子の友だちがきたときも、チツルはソファに寝そべったままでいて、背を向けていた。友だちは四、五人で、ぺちゃぺちゃしゃべりながら茶の間をぬけて、二階に上がつていった。

二年で立候補するの、ウチの植野^{うえの}と、四組の桑田^{くわた}だけだからさ。男子はたいてい二年生のほうが票とるから。植野のほうが有利だぞ」

という男子の声もして、チツルは寝たふりをしていたにもかかわらず、あやうく寝返りを打つて、のぞき見をするところだった。立候補するのおねえちゃん、選挙タイサク本部に男子がいるというのがチツルにはびっくりもので、それだけ、おねえちゃんがエラいのかもしれないが、いつもだったら得意に思うそんなことも、今日ばかりは腹が立つてきてしょうがなかつた。

けれど、腹は立つのだけれども、なにを話しているのかが、やっぱり気になつて、チツルは歯をくいしばつて肩^{かた}で息をしながら、こっそりと階段をのぼつていった。

階段をのぼりきつたどんづまりに、障子戸^{しょうじど}があつて、その向こうからは楽しい笑い声がきこえてきた。

選挙タイサク本部のわりに、みんながしゃべっているのは普通のこと、

「こんど、テープレコーダー買つてもらうんだ、おれ。英語の勉強だつていったら、親が買つてくれるってさ」

「ねえねえ、あれ、ほんとに声がおなじなの？」

「うっちゃん、このプレーヤー使えるの？ ソノシート持つてきてるんだけど、聞かない？」

といったようなことを、笑いながらいつているのだった。

そのうち、だれかがチツルのことをしゃべつてくれないかと耳をすませてみたが、だれも、ソファで依^{*2}怙^{こじ}地になつて寝ていたチツ

ルには気がつかなかったようで、チヅルはますます悔しくなり、足音をしのばせて階段をおりた。

笑い声があんまり大きいので、

(いったい、何人きてるんだ。あたしん家なのに)

とやにわに腹が立ってきて、玄関にいつてみると、靴は五人分あって、男子の靴はふたり分だった。

その五人分の靴を見ているうちに、たまらなく憎たらしくなってきた。おねえちゃんもおねえちゃんの友だちも、中学生だと思っ
ていばつていて、小学生のチヅルをバカにしているに違いないと思えてくるのだった。

チヅルはぎゅつと歯をくいしばってから、五人の靴をそれぞれ、靴箱や、外の石炭小屋や裏口に運んで隠してしまった。

そうして外に出て、自転車で学校をめざした。カヨコかミユキを誘って遊んでもよかったのだけれど、なぜか、人と遊ぶ気にはな
れずに、ひとりでいたいような気がしたのだった。

学校のグラウンドはもうひっそりとしていて、教室の窓もぜんぶ閉まり、生徒はみんな帰ったようだった。

チヅルはブランコに乗ったり、^{*3}百葉箱をあけて温度計を見たり、川つぶちをたがやしてイモやナスビを植えてある生徒菜園のほ
うに降りていって、葉っぱを点検したりして時間をつぶした。

だんだん日が落ちてきて、グラウンドも校舎もしんと静まり、人の気配というものがなくなっていた。

動いていないとこわいので、チヅルはもう一度ブランコにのり、勢いをつけてこいでいたが、そのうち、ふいにグラウンドのはし
つこにある外灯に明りがついた。

外灯に明りがつくのは、六時すぎに違いなく、六時すぎといえは清子が帰ってくる時間で、これ以上、家に帰るのが遅れると叱ら
れてしまうので、チヅルは B、また自転車をこいで家に帰った。

もう、悔しい気分はすっかり消えて、歌子が怒っているのではないかと、そればかりが気になっていた。

家に帰ってみると、電気がついておらず、まだ清子も帰っていないようで、それはホッとしたが、歌子もいないようで、わけがわ
からなかった。

電気をつけて、ぼんやりと茶の間のソファにすわっていると、カタンと物音がして、二階から歌子がおりてきた。³歌子の目は真っ
赤で、今まで泣いていたようだった。

てつきり叱られると思って身構えていたチヅルはびっくりして、上目づかいに歌子を睨んでいると、

「チヅル、折田くんの靴、どこにやったのさ。折田くんのだけ見つからなくて、折田くん、上靴はいて帰ったんだよ」

というなり、歌子は茶の間にすわりこんで、わっと泣き出してしまった。

チヅルはあつけにとられてしまったが、すぐに我にかえって、あわてて家をとびだし、裏の畑のトマトの木の下につつこんであつ
た男子の運動靴をひっぱりだした。

内心では、やっぱり、ここのは見つからなかったかと得意な気持ちも少しはあつたが、それよりも歌子が泣いているのが驚きで、
とてもものに、ザマアミロとは思えなくなってしまうていた。歌子が泣いているのをみるのは、チヅルは初めてだったのだ。

「おねえちゃん、これ……」

まだすすり泣いている歌子に、C靴をさしだすと、歌子は何度も手の甲で頬をこすってから、出窓においてある電話機の
受話器をとった。

メモもなにも見ずに、歌子はダイヤルをまわして、どこかに電話をかけた。

「折田くん、うん、あたし、植野。靴みつけたから。明日、学校にもってくから。うん。他の靴、あるの？ うん。ごめんね」

⁴歌子は何度も何度もごめんねといい、最後には涙声になって、電話のむこうの折田くんになだめられているようだった。

チヅルはふと、月に一度くらい電話をかけてきていたのは、この折田くんではないかという気がしてきた。

今までは、友だちが電話をかけてくるというゼータクにびっくりして、まさか相手が男子だとは思像もしていなくて、当然、クラ
スの女子だろうと思ひこんでいたのだけれど、この時ふいに、きつと、電話は折田くんに違いないと思えてきたのだった。

「おねえちゃん、おかあさんにいってもいいよ」

歌子が電話をきってから、謝るつもりでそういうと、

「いいよ、もう」

歌子は怒っているふうでもなく、ただ気が抜けたようにいって、のっそりと二階に上がっていった。ただもう、折田くんの靴がみ
つかったことにホッとして、ほかのことはなにも考えられないみたいだった。

今日は、歌子がお米をとぐ当番だったのだが、台所の流し場を見ると、お米がといでなかった。

チヅルはおわびのつもりで、歌子の代わりにとぐことにして、米櫃からお米を三合もってきて、シャツシャツと慣れた手つきでお
米をとぎながら、ふと、

(おねえちゃん、折田くんが好きなかもしれない。チヅルよりも、好きなのかな)

と思った。

そのとたん、どうしようもない淋しさがどうつと風のように押しよせてきて、チヅルはわけもなく大声をあげたくなった。

そんな荒々しい気持ちは初めてで、胸が苦しくなって、涙が浮かんでくるほどだった。

(おねえちゃんなんか、きらいだ。折田もきらいだ！)

チヅルは歯をくいしばり、足を踏んばって、いつまでもいつまでも力をこめて、お米をとき続けた。

(氷室冴子著『おねえちゃんの電話』より)

*1 妄想：ありもしないことをあると思ひこむこと。

*2 依怙地：意地をはって考えを変えようとしないうこと。

*3 百葉箱：気象観測などにつかう箱。

問一 ～～線 a「めざとく」、b「口のいやしい」、c「ムシのいどころが悪かった」とありますが、その意味として最もふさわしいものを次のア～エから選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---------------|----------------|-----------------|----------|---------|
| a「めざとく」 | ア 見つけるのが早い | イ 偶然に | ウ やつとのこと | エ 予想通りに |
| b「口のいやしい」 | ア 言葉づかいが悪いこと | イ ひねくれていること | | |
| | ウ 意地きたないこと | エ うそをつくこと | | |
| c「ムシのいどころが悪い」 | ア ひっこみがつかないこと | イ 体調が悪くいらしていること | | |
| | ウ 思いこみで決めつけること | エ きげんが悪く怒りっぽいこと | | |

問二 ——線1「面倒臭そうにいいながら、顔はすっかり、にこにこ笑っているのだった」から読み取れる、母の清子の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～エから選んで、記号で答えなさい。

- ア 娘が生徒会の役員に立候補すると聞いたが、目立つことをして嫌われないか気になるのを笑ってごまかしている。
イ 娘が生徒会の役員に立候補すると聞いて、うまくやれるか少し心配しながらも、うれしくたのもしく思っている。
ウ 娘が生徒会の役員に立候補すると聞いて、本心ではやめさせたいが、親として娘を温かく見守ろうとしている。
エ 娘が生徒会の役員に立候補すると聞いたが、話がややこしくなりそうなので、笑って話を切り上げようとしている。

問三 文中の I には次のア～エのいずれかの文が入ります。最もふさわしいものを選んで、記号で答えなさい。

- ア 家にとんで帰った。 イ 中学校へ向かった。 ウ 寄り道しながら帰った。 エ 校庭で遊んでいた。

問四 ——線2「悔しくてブスふくれている」とありますが、なぜチヅルは悔しくてブスふくれているのですか。

問五 文中の A C にはどのような言葉が入りますか。ふさわしいものを次のア～オから選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- ア おずおずと イ そわそわ ウ しぶしぶ エ ゆるゆると オ きびきびと

問六 ——線3「歌子の目は真っ赤で、今まで泣いていたようだった」とありますが、それはなぜですか。

問七 ——線4「チヅルはふと、月に一度くらい電話をかけてきていたのは、この折田くんではないかという気がしてきた」とありますが、チヅルがこのように思った理由と思われる一文を探し、最初と最後の五字を書きなさい。(句読点も一字に数えます。)

問八 文中の ① ③ には、次のア～ウのいずれかの文が入ります。それぞれふさわしいものを選んで、記号で答えなさい。

- ア いいんだ。チヅルだって、おねえちゃんなんかきらいだ！
イなのに、おセンベ食べたくらいで、おかあさんにいいつけるっていった
ウ おねえちゃんは、チヅルより選挙のほうがだいじなんだ